

平安時代の武士の屋敷跡を発見

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 石を積んだ溝と屋敷跡 (北から)



写真2 石を積んだ溝と2列の防御柵 (東から)

1996年11月から翌年3月にかけて行なった京都大学西部構内遺跡(左京区吉田泉殿町)の発掘調査で、平安時代後期の屋敷跡が見つかりました。平安京の北東部、鴨川を東に越えた地点です。この屋敷跡は、出土した土器から12世紀後半に造られたとみられ、豪華な邸宅とも庶民の家とも異なる風変わりなものでした。

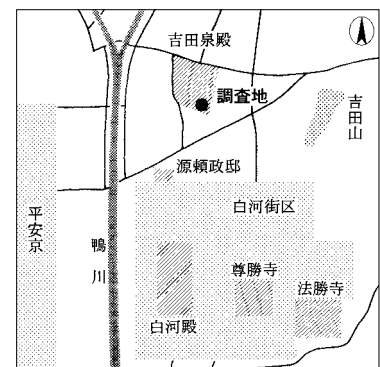
検出した遺構は、屋敷を囲う溝と塀、建物、井戸などで、一辺30m以上ある四角形の屋敷跡の一部と思われます。屋敷の北側を区画する溝は、屋敷側の斜面に丸味のある河原石を積んで護岸しており、この時代のものとしては手の込んだ珍しい造りです。この溝の

一部を掘り残して橋とし、屋敷の出入口としています。溝の内側には、板塀の跡と思われる柱の並びがあり、出入口部分には簡単な門が設けられていたことでしょう。屋敷の西側に設けた小さな調査区でも溝を確認できました。

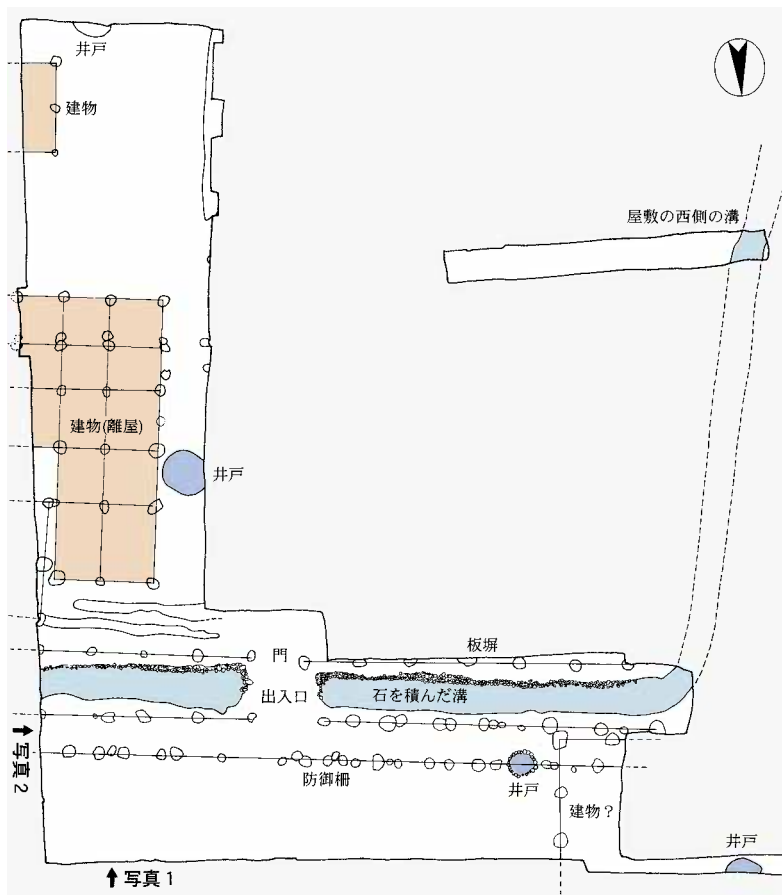
溝の外側にさらに2列の柱の並びがあります。この柱列はどちらも柱跡が重なりあい、何度か建替えられたことを示しています。これを、戦乱の際に設けられ、日常は取り外された防御用の柵跡と考えました。溝と板塀に加えて2列の防御柵からなる構えは、戦国時代の堀や土塁などと比べると、いかにも頼りないものに見えます。しかし、平安時代の戦闘は騎馬武

者が弓矢で争う場面が多く、検出した溝と塀と柵は、これに充分対抗できた防御施設なのです。

屋敷の内側には、建物跡1棟と建物跡と思われる柱列を数箇所検出しました。いずれも細い柱を用いた掘立柱建物で、草や板で屋根を葺いた簡素な建物です。これらの建物は、家来の住居や作業小屋



調査地の付近のようす



検出遺構の平面図 (1 : 300) 絵巻と比較するため、北を下にしてある。



『一遍上人絵伝』に描かれた地方武士の屋敷 鎌倉時代後半の製作。溝と板塀に囲まれた簡素な住宅で主人が飲食している。

清浄光寺蔵 (『日本の絵巻 巻20』中央公論新社より)

と見られます。屋敷の主人が住む家屋は調査区を外れた位置にあるのでしょ。井戸もそれぞれの建物の近くに検出しました。

出入口付近の溝の中からは、多量の土師器の皿がまとまって出土しました。この皿は主に酒を飲む杯として用いられた使い捨ての器で、酒宴の後にまとめて捨てられたものです。また、珍しいものは高麗青磁の梅瓶や中国製の白磁水注などが出土しています。

広い屋敷に防御施設を構え、簡素な住居に暮らし、酒宴を楽しみ、高級な器を用いる。そんな人物がこの屋敷の主人だとすれば、それは当時京都で勢力を伸ばしつつあった武士の姿が思いおこされるでしょう。

平安時代の終り頃、藤原氏を中心とした摂関政治に代わって、上皇が自由な立場で政治を行ないました。院政です。上皇に近づきこれを支えたのが、地方に領地をもつ受領ずりょうと呼ばれる下級の貴族層でした。その中でも武力を持った武士は、上皇や上級貴族の警備や、悪僧の鎮圧に活躍し、戦乱が起こるたびに力を伸ばしました。この屋敷跡はそんな時代の武士の住まいであったと思われます。

調査地の近くには、上皇に仕えた武士、源頼政の屋敷もあったとされています。当時この付近は、高野川の河原のような荒地で、住居としては良い場所ではありません。しかし、上皇の御所である白河北殿に近く、武士が屋敷を構えるにはうってつけの場所であったでしょう。 (内田 好昭)